

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成29年7月24日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻井昭雄様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職名・学年 助教

氏名 梶丸 岳

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	International Council for Traditional Music 44th World Conference 国際伝統音楽学会第44回世界大会	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )	
発表題目	The Melody as Mold: a Comparative Study of Melody-Word Relationship of three Asian Reciprocal songs	
開催場所	アイルランド・リムリック大学	
渡航期間	平成 29年 7月 11日 ～ 平成 29年 7月 21日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	学会参加費
航空券代		204,800円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回いただいた助成のおかげで研究を国際的なレベルにあげていく大きなきっかけをつかむことができました。また事務処理上も非常に使い勝手がよく、事務上の負担が少なく済みました。ありがとうございました。	

# 平成 29 年度 国際研究集会発表助成・Ⅱ期 成果の概要

人間・環境学研究所 助教 梶丸岳

## 1. 参加学会の概要

研究集会名：International Council for Traditional Music (ICTM) 44th World Conference

(国際伝統音楽学会第 44 回世界大会)

開催場所：リムリック大学 (アイルランド)

開催期間：平成 29 年 7 月 13 日～平成 29 年 7 月 19 日

今回報告者が参加した学会である International Council for Traditional Music (ICTM) は、1947 年に創立し今回で設立 70 周年となる世界最大の民族音楽学系学会のひとつであり、NGO としてユネスコの公式諮問機関にもなっている。ICTM の世界大会は 2 年に 1 回開催されており、今回は約 560 名の発表と 74 カ国から 650 名ほどの参加者を集めた。今回の学会では「ICTM70 年：過去・現在・未来」「音楽とダンスにおける遺産と想像」「民族音楽学、民族舞踊学、デジタルヒューマニティーズ」など 6 つのテーマが設けられ、民族音楽学のみならず民族舞踊学、図書館情報学やアーカイブ研究など、非常に幅広いトピックの口頭発表が行われた。また ICTM はさまざまな研究関心ごとの研究グループを設けており、数多くの研究グループのビジネスミーティングも行われた。さらに学会期間中はホールや休憩エリアなどでアイルランド音楽を中心とするさまざまなパフォーマンスが行われるなど、国際的な民族音楽学の学会にふさわしいオープンで活発な雰囲気の中、学会が行われた。

## 2. 報告者の発表内容と成果

報告者は The Context, Structure and Context of Performance in Japanese and Other Asian Musics と題されたパネルにて「The Melody as a Mold: A Comparative Study of the Melody-Word Relationships in Three Kinds of Asian Reciprocal Songs (型としての旋律：3 種類のアジアの掛け合い歌における旋律－歌詞関係についての比較研究)」と題して口頭発表を行った。

掛け合い歌は複数の歌い手が決まった旋律に即興で歌詞を付けて会話のように歌を交わす歌の形式である。従来音楽の即興技法についてはネトルらが、多くの音楽において即興が演奏上の「構成要素 building block」の組み合わせに基づいていることを指摘してきた。また歌の歌詞についても口頭構成法研究において数多くの口承文芸において定型表現が使われていることが指摘されている。両者が交叉する、韻律詩による歌における即興性についての研究は多くないが、数少ない事例においても、即興が歌詞と旋律が一体となった構成要素の組み合わせに基づくことが指摘されている。今回の発表は、これまで報告者が研究してきた事例から、歌の即興では必ずしも構成要素に基づく構成法が取られるわけではないことを明らかにすることを目的としている。第一の事例とした中国貴州省のプイ歌は明らかに構成要素に基づいているが、第二の同じく貴州省で歌われる漢歌においては、旋律と歌詞が厳密な音数律に従った歌詞を入れる「型 mold」になっており、さらに第三の事例として挙げた秋田県の掛唄では旋律が必ずしも音数律に従っていない歌詞でも受容する

「枠 frame」として機能していることを示した。発表に際しては動画と五線譜に書き起こした事例を示し、聴衆がわかりやすく納得できるよう心がけた。

質疑などではノルウェーの似たような歌の韻律を研究している方から、こうした研究は少ないため報告者の発表が聞けて非常に嬉しかったとわざわざコメントいただくなど、非常に好意的な反応をいただいた。また歌い手がどのように歌を習得するのかということや、歌の伝承に関することなど、時間の都合で省略した社会的背景に関する質問もいくつかいただいた。基本的にはどれもこれまで報告者が日本語で発表してきた内容に関するものであったが、本発表内容を英語論文にしておく上で貴重な示唆をいただいた。

### 3. 研究発表以外の成果

本学会では歌の旋律分析や音性 tonality に関する発表など、今回の発表内容に関連する非常にさまざまな事例についての発表を聞くことができ、ノルウェーやエストニアといった北欧の民謡研究者やラオスのカム族の民謡についての著書があり以前から報告者が関心のあった研究者、さらには Timothy Rice など民族音楽学の理論研究を牽引する研究者など、さまざまな研究者との国際的ネットワークを築くことができた。報告者はラオスの掛け合い歌についても調査をしており、今後ラオスの研究を進める上で ICTM の研究グループのひとつである「Performing Arts of Southeast Asia (PASEA)」に参加することが叶ったことも大きな収穫であった。また本発表がパネルのチェアを含め非常に好意的に受けとっていただいたことは、今後報告者が英語で論文を執筆していく上で大変励みになった。

### 謝辞

今回の学会参加では他にもこれまでまったく知らなかったアイルランド音楽を体験し知見を深めるなど、予想以上の成果を得ることができた。本学会参加が報告者にとって研究を国際的舞台で進めていくうえで極めて大きな意義を持ったことは間違いない。こうした貴重な機会を与えてくれた京都大学教育振興財団の関係者各位には心から御礼を申し上げたい。